

---

# アゲハ。

司都萌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アゲハ。

### 【Nコード】

N5116BA

### 【作者名】

司都萌

### 【あらすじ】

高校生の主人公、蓮岡達也は学校の廊下ですれ違った見たことの無い制服を着た女の子に一目惚れした。

その女の子は達也のクラスに転校してきた。

達也は何とかその女の子と仲良くなりたい！ そう思っていた。

達也は同じ部活の友達たちの力を借りて少しずつ話していくことが出来るようになっていった。

転校生も達也の入っている部活に勧誘して仲間にした。

だが、そんな達也には、二年間ものあいだ、心に秘めていた 果

たさなければならぬ誓いがあつた……。

零話 『天へ放つ願い』（前書き）

正直な話、司は学園ものとか書くのが苦手です。

ですが、その手の世界観は結構好きです。

ですので、上手くなりたいなと思い、この物語を書き始めました。

零話 『天へ放つ願い』

ガタンガタン……ガタンガタン……。

レールとレールの繋ぎ目を鋼鉄の車輪が踏み拉く度に、一定のリズムによって小気味良い振動と角張った音が、この体と鼓膜を刺激してくる。

ここは通学途中の列車の中。

ポチ……ポチポチ……ポチ……。

「……………」

ドアに張り付いている硝子窓から、見える飛ぶ景色には目もくれず、僕は今日も朝から携帯を片手にメールを打っていた。

それは休日であろうと、通学途中の電車の中であろうと、朝になればいつもやっている事だった。

相手に届く事を願い、今日こそはと、毎日毎日送り続けているメール。

それは桜の花びらが散っていくとき。

息づく若葉が爆発するかのように広がりわたっていく瞬間。

移り変わっていく紅の季節。

そして物寂しい凍てつく白亜の時間の中でさえも、幾度も流れにこの身を逆反らせては、それでも諦めまいと続けて来た。

「おはよう」

「おはよう」

何度となく繰り返されていく言葉。

何度でも繰り返していく言葉。

この言葉は特別ないた言葉ではない。

隣にいる彼も、目の前に立っている彼女も、何の気兼ねもなく使っているごく当たり前の挨拶だ。

現にこの電車の中でもよく聞く言葉。

この世の中で本当にありふれた一言。

だが、この世の中でたった一人。僕だけはそれを特別な言葉とし、毎日使い続けていた。

誰がそれを見抜けよう。誰がそれを裁けよう。

「おはよう」

この言葉から始まる僕のメールは、

凍みる氷の爪で引き裂かれたその人を思い、天へあげる僕の心の叫びだった。

あの日、全てが喰らい尽くされた。

犯罪という名の牙に心を砕かれたその人。

生き延びはしたものの、残酷な夢にその魂を沈め、あてもなく彷徨うその人の心の放浪が始まった。

まるで悪夢のような闇から、その人を引き上げようと繰り返されてきた僕のメール送信の日々。

そんな先の見えぬ暗黒が、僕の心を幾度も折りかけた。

けれど、その度にあの笑顔が、思い出が、閉じかけている未来が、その諦めの思いに足を捕られていた僕に活力を与えてくれた。

頑張れ……………と。

命を刻々と刻んでいるその人は、心の中で戦っている。出口を捜し求めて必死になっている。

僕は、その人の導になるようにと、心の中に届けと、毎日言葉を送り続けているのだった。

「おはよう」

今日も僕は朝からメールを打っている。

白く苦しい思い出を、塗り変える青色に願いを託し、今、この言葉に蒼穹へ羽ばたく翼を与えた。

それは、天へ放つ願い。

願いは、僕の全てを託している。

届け……。さあ、届いてくれ！

## 一話 『聖炎』

冬……。十二月半ば。

世間ではクリスマスソングが鳴り響く時期だった。窓に手を当てれば、ほわっと白くなる。

そんな寒い朝のことであった。列車の中は様々な人がいる。

ワイワイと学生達が賑やかに話す。

サラリーマンは新聞を読む者。眠っている者

他にも学生やサラリーマン問わず、携帯を弄っている者。耳につけたイヤホンで音楽を聴いている者。

本当にみんな自由にやっている。

この在り様を見てみれば平和そのものだった。

まあ、だからといって今にもこの事態が急変するような危機が迫っているかといえはそうでもない。それは当たり前前の事である。

勿論というか、僕もこの平和な世界の住人であった。

ガタンガタン……。ガタンガタン……。

驚進する列車の振動に、グラリグラリと揺られている僕のこの身体。やはりというか、それほど鍛えられた体ではなく、自分でも時々もやし……。と考えてしまうほどにヒョロリとしている。

転倒防止のために、車内に設置されている手すりをとらえているこの左腕。

力こぶを作ろうと腕を曲げても、むしろ逆に陥没してしまうのではないかと思える程に情けない腕だ。

そんな腕をした手には携帯電話がよく似合う。

そんな事を考えながらさっきからメールを書いていたのだけれど、今しがた完成したんだっけ。

僕は最後の確認とばかりに全文を一読すると、携帯の送信ボタンを押した。

送信元……「蓮岡達也」はすおかたつや 僕の名前だった。

ついさつき乗ったばかりの電車は都市圏へ向かうのとは逆方向のため、ラッシュ時でありながらも、それほど混むことは無い。

その理由は、端的に言えばここが田舎であつたという事に原因がある。

列車の外に見える景色は田んぼに畑、そして森などが多く見られた。

ただ、都市圏への直通電車も何本か走っているため、ベッドタウンと言う程にはおこがましいが、この一帯から都市圏へ働きに出ている人もわりと多かつた。

しかしそれでもやはりと言うか、市の総人口は少ない。市として成立する人口要件をギリギリ満たしている程度の総人口だった。そこがおこがましいと言った真意だった。

また、この電車の乗車率といえは、まあ人は乗ってはいるけれども、パーセンテージに言い換えてみれば八十%位で、一人一人が自由に何かが出来るのは考えるまでもなかつた。

何気なく携帯のディスプレイを見ながらそんな事を考えていると、  
「あ〜、だり〜」

その言葉が耳に入ってきて漸く僕の周りに仲間達がいる事を思い出した。

パタリと携帯を閉じる僕。そして声の主を見た。

だるいと言って大あくびした少年。それは僕の仲間だ。

手に持っていたポストンバックを床に置き、気だるそうな雰囲気そのまま、長身な体を折り曲げ、両肩を垂らしてまたあくびをした。

かなり疲れているのか眠いのか、力なく頭までガクツと落とした。

まだ朝八時。眠くなるにはまだまだ早すぎる。いや、それともまだ寝ぼけているのか？

その姿を見かねて、少年の真横に立っていたもう一人の男の子がひとこと言った。

「こちらまでだれて来る。シャキツとせんか」

男の子は、だらけていている少年に比べ、どこか大人びた落ち着きのある雰囲気醸し出している。そんな男の子も僕の仲間だった。

うな垂れている少年は「るせー」と、呟く。

視線まで床に落としてだれていている少年は、一定のリズムにそって揺れている床に、とうとうへたりこんでしまう。

だらけているその少年は、身長はそれなりがあるが、全体的にみてみると、ほっそりとしており、いわゆる痩せ型という感じであった。

しかし僕みたいにもやしと言うにはまだ筋肉はある様子。

頭は鳥の巣のようにボサボサ。いや、彼の名誉の為に言っておくけれど、決して不潔ということではない。彼に言わせれば、

「この髪型がオレ様のポリシー」ということであった。

だらしないように見受けられるが、こう見えて少年は、勉強……学力はずば抜けて高く、それを誇らしげにしている。自分の事は「オレ様」と呼び、一見不良ぶっついていて、物腰が決して良くもないため、やはり周りからは良いイメージが無い。

奇妙なことだが勉強以外には小説を書いているのだが、それら以外にやる気が無く、怠け者である。しかしその聡明な頭脳により、何かをしでかすのではないのかと、教師達に警戒させている。

周りから囁かれている。「神にも魔王にもなれるのに、その怠惰さと中途半端な度胸が勿体無い」と……。

とまあ結構マイナス面を語ったけれど、じつは良い所もあり、それは物腰にそぐわぬ友情に篤いところがあつたりもする。

ちなみに本人曰く知的ボケ役。

そうそう、名前は「定本亮」といい、皆からサダっちと呼ばれている。

そしてそのサダっちにひとこと言った男の子は、僕達学生の中でも、取り分けて大人びた落ち着きを持つ男の子だった。

何より威厳を感じさせるのは、一つには僕達の仲間内の中でも一番身長が高いところにあるのかも知れない。

巨漢でじんわりとした迫力があり、制服の外からでもわかる彼の筋肉質の体。何かの武道をやっているようにみえた。

でも同年代の男の子たちに比べて紳士的で、かつ糸目が可愛く、密かに女子からは慕われていたりもする。

そんな彼の名前は「木田鉄男」と言う。サダっちには「マグマ」と呼ばれている。

サダっちと木田君は古い付き合いで、幼稚園の頃から一緒だったという。そんな頃からの付き合いのサダっちがそう呼ぶのだから何か謂れがあるのかも知れない。

本人曰く、よくボケるサダっちに突っ込みを入れる定めをもって生まれてきたお人らしいです。

「朝飯食ってねえんだ。力が入らねえんだよ」

そうサダっちが文句を言うのと、

「ただ眠いの間違いで無いか？」

と、またしてもすかさずつつこむマグマ君こと木田君だった。

「はあ〜、ここが戦場なら、この人命あらへんかも」

へたっている定本亮ことサダっちの真ん前に立ち、揺り動かされる我が身を、手すりを掴んで支えている少女は、呆れるかのような言葉を放った。

「あ〜？ 徹夜で疲れてるんだからしょうがねえだろ……」

「昨日も同じこと言うてはりましたねえ？」

少女は呆れるにも飽きたのか「はあ…」と眠たそうにため息をつく少年を見下ろしてポツリと言った。

「仕方ありませんね。この人はこれが標準なんです。不摂生という言葉はこの人の人生の御旗に書かれた言葉ですー」

「つつせえ〜なあ〜。オレ様に文句あるならパンツめくるぞ？」

ガタンガタン……ガタンガタン……。  
列車は揺れる。

「痛つつつ……。スカートと間違えただけだろっ！ それ位で脳天チヨップ入れなくてもいいじゃねえかよ！」

へたり込んでいたサダつちは、両手で頭を抱えたまま涙目になってぶうたれた。

少女はつんと横を向いて怒っていた。

「乙女の神聖なる領域に手を伸ばそうとしたパパが悪いんですわ」  
そう、サダつちのことをパパと呼ぶこの女の子。名は「斉田かなこ」ちゃんといった。

この関西弁系のイントネーションが特徴のかなこちゃん。  
中学の時に親の転勤の為に大阪から引っ越してきて現在に至るらしいです。

この埼玉では喋り方が関西系というのは珍しく、また、彼女自身乗りの良い性格の為か、クラスの皆から人気があるそうです。

勉強は本人も自覚しているようで、ほぼ壊滅的だとか。

普段は気ままな関西系イントネーションでサダつちの事をいつもからかい、オモチャにして遊んでいます。

かなこちゃんは一四九センチという小さな体に対し、全長三〇センチのブーメラン型アホ毛があるのですが、それを笑うと、得意のプロレス技がサダつちにかかります。誰が小ばかにしても何故か必ずサダつちに攻撃がいきます。

何かで褒められた時なんかも、例外なくサダつちにプロレス技が入ります。

まさに照れ隠しの様で可愛いなのなの。

かなこちゃんは僕とサダつち、そしてマグマこと木田君この三人組の一個下の高校一年生。

言わずもがな僕達三人は高校二年生でかなこちゃんの先輩にあたる。

「ったくよ、達也、黙っていないで俺に助け舟を出してくれよ〜」

鳥の巣頭をさすりながら僕に助けを求めてきたサダっち。

この一連のだらけっぷりを見ていた僕は、

「鳥の巣頭を叩いてみれば？」

そう言ってみた。すると、

「セクハラ音頭の音がする」

今さっきまでつんと怒っていた少女が乗ってきて、そう言つと「ひひひ」と笑った。

「てめえら、それを言うなら『文明開化の音がする』だろっ！」

立ち上がって抗議するサダっち。

抗議している本人以外の僕達三人は、笑い出してしまった。

「くくくくく」

「マグマ！ お前、珍しく笑ったかと思うとキモイんだよ、その笑い方は」

マグマこと木田君は、持ち前の糸目を更に細くして笑っていた。

「でも、プツ」

僕は嘔き出してしまいそうだった。

だってそうじゃない。セクハラ音頭だよ。何？ 音頭って？

「亮。言葉は吟味し、意味をわきまえて発するようにしろ、くくくく」

笑いながらだけれども、威厳のあるそのセリフを発したのは、さつきサダっちに「マグマ」と呼ばれた木田君。

たぶん今の彼の一言はパンツとスカートを言い間違えたことを指摘したのである。

「そうです！。学力のわりに語彙が貧弱で泣けてきます！。もう少し本読んだ方が良いんとちやいますか？」

カツと来たのかサダっちは、

「五教科万年赤点のてめえに言われたら俺も終わりだな……」

そう憎まれ口を返した。

「そつだ。たっくん先輩、先週の金曜日と言っていたバイトの応募に書く履歴書の自己アピール。続き教えて下さいよ」

「え〜、勘弁してよ〜」

「だ〜めで〜す」

そう言っただけかなこちゃんはマイクを持つ手になって、僕の口もとへ手をよせた。

たつくん先輩こと蓮岡達也……つまり僕にインタビューをしてきた。

目を瞑って黙っていた僕に焦れたのか、かなこちゃんは僕のプロフィールを矢継ぎ早に喋りだした。

前回、少ししか僕は話していなかったのだけれども、それを元にかなこちゃんは多くの付け足しをしたレポーターになって言った。

そして内容はこうである。

「名前は蓮岡達也。読書が好きな高校二年生。その愛読書の名前は「放課後団地妻」が挙げられる」

してやったり、と言わんばかりにケラケラ笑っているかなこちゃん。

「ちょっと待ってよっ、なに？ その「放課後団地妻」って」

放課後……は、解らないでもないが、そんな如何わしいタイトルの本は僕、読まないよ。

「おほん。真面目にいきますねー。愛読書を肌身離さずにかけている。人望も厚く、知恵者であり、不正を憎む正義の心を併せ持っている、かなこ達天文部の劉備玄德」

褒めすぎだよ、かなこちゃん。

「じゃあオレ様は名前が名前だけに諸葛亮になっちまうな」

ニコニコしながらそう言って立ち上がるサダっち。

「パパ、無理に当てはめて、照れんでも良いですわ。パパはどう足掻いても董卓將軍ですわ」

得意げになっているサダっちに冷たい突っ込みが入った。

董卓將軍。それは古代中国の武將の名前で暴虐將軍と呼ばれていた。

「貴様……!」

ギリリと睨んだその視線。然しそれは「のれんに腕押し」が如くかなこちゃんに飄々としている。

「さ、ちょこりんは放っておいて。次はたっくん先輩の趣味」

「斉田、せめてちょんをつけてやれ。ただでさえ惨めだが、省略される、なお惨めで見ていられん」

とは木田君。

ちょんちょこりんとは所謂、ゴミ……だ。

「俺はおまえらが望んで作った部活の部長たる……」  
サダつちは涙を流していた。

そうだった。サダつちは僕達四人天文部の部長さんだったっけ。

「しょうがないですね……よしよし」

かなこちゃんはそう言うと、サダつちのあごを撫でてやった。

まるで青筋マークが額に走るような顔をしているサダつち。ああ

……おもちゃだ。

「パパ。はいゴロニヤ〜ン」

「んな事言うか!」

「そういえばたっくん先輩の趣味は何ですか?」

ギンと睨むサダつちの視線をやっぱり意にも介さず、サダつちの顎をクシユクシユ撫でながら僕の事を再び話し始めるかなこちゃん。

サダつち可哀相に。哀れだから僕は彼の事をそっとしておいた。

「そうだね。王道な勧善懲悪の時代劇を見るのが好きだね〜」。

「水戸の黄門さまですね?」

「うん。あと、暴れちやう將軍様とかね」

「良いですね〜。かなこも大好きですわ〜」

そうだ。他にも小説とかよく読んでいたりもするけれど、意外と熱い展開が好きだ。

自分は喧嘩は強くないけれども、物語に出てくる主人公。その主人公が、どうしようもない悪をバツバツ倒していく正義の行いにあこがれる。

弱い僕達にはとても真似できないことだけでも、やっぱり素晴

らしい事だと思つ。

「僕とかなこちゃんって本当に気が合つよね」

「はいな」

減速する電車。

「そろそろ駅に到着するね」

サダつちに背中を向けているかなこちゃんのアホ毛をビヨンビヨン叩いているサダつち。

「このアホ毛はこうやってビヨンビヨンさせてやると成長するんだ」  
かなこちゃんのアホ毛を愛でるように（？）遊んでいるサダつち。  
「かなこの髪に気安く触らんといて下さい！」

ドムツとサダつちのおへそ付近にかなこちゃんの振り返り様の左ストレートが入る。

それと同時に停車した電車のドアが開き、かなこちゃんがビヨンと飛び降りた。

そしてかなこちゃんは僕達に向かって振り向くと、

「さ、駅につきましたよ。たっくん先輩にマグマ先輩。ガッコに行きましょう」

あからさまにサダつちを無視するかなこちゃん。内心では意識しているであろう事が伺える。

それをサダつちは解つてか解らずか、

「ほら、おめえら、電車のドアが閉まつちまうぜ？」

そう言うのとニヒルに笑いながら「行くぞかなこ」そうも言つてポストンバックを背負つて歩き出した。

「あつ待つてパパッ」

頭二つ近くも身長差があるサダつちの後をついて行くかなこちゃん。

僕と木田君はそんな二人の姿に笑いがこみ上げてきて、

「行くぞ、蓮岡」

「そうだね」

と、毎朝のこと程ではないが、ポカスカして今日も元気で楽しい

一日が始まったことを喜び歓迎した。

学校。昇降口で皆と別れたあと、僕は教室に向かって歩いていった。

階段。廊下。教室。

僕はこの頃よく辺りを見回して校内を歩いている事が多い。

探すように、求めるように、キョロキョロと見回す。

何事もなく教室に着くと、今日もまた肩を落とし、自分の席に向かった。

予備鈴が鳴り、みんな席についてそれでもワイワイ賑やかに話声が聞こえていた。

僕は机に両肘をつけて両手の甲を頬に挟み支えろと考え事を始めた。

「はあ……………」

気がつくとき深くため息をついていた僕。

それを聞いていた隣の席の女の子が「何ごと?」と訊いてくる。

「あれー。達也君珍しいね、ため息なんて?」

体を前のめりにして左に着席している僕に向かって不思議そうにしている彼女。

「冷蔵庫の奥にしまっていた秘蔵のプリンを妹さんに食べられたとか?」

「何、その秘蔵のプリンって(汗)」

僕は彼女の思考に半分呆れながら「違うよ」と答えていた。

妹……………か。

「ベッドの下に隠してあるこれまた秘蔵の煎餅がお母さんに見つかってしまったとか?」

「それも違うよ(涙)」

僕はこの天然な彼女の思考に、いつも一生懸命ついていこうとしているのだが、中々どうして追いつけないでいる。

「じゃあどうしたの?」

目をクリクリさせて、興味津々と言わんばかりに尋ねてくる。

彼女の名は桐生宮子。

この学園に入学した時から一緒に学校生活を送ってきた女の子。一年、二年と同じクラスであったから、恐らく来年も同じクラスであろうと思われる。

彼女の天然ボケツプリは常に周りの人たちを巻き込み、彼女の放つ波動が周囲の人々をユルユルにしまつという恐るべき雰囲気と特質を持ち合わせている。

そんな本人は自分のこと曰く「慌てない」「無理しない」「頭が悪い」と三拍子揃った甘い果実だそうです。

ですが、それはそれで危険な気がします。他にも僕が言うのもなんですが、ドジでもどかしく、取り得は何一つ無さそうですが、それはさておき、よく気がつき、優しく僕達男子によく尽くしてくれます。

そんな彼女の将来像は「かわいいお嫁さん」だそうです、僕達クラスのお男子共通の思いですが、彼女は頭が弱い点を含めて、幸せな家庭のお嫁さんに収まってもおかしくない女の子。と認識しています。桐生さんは僕が知る限り、一番女の子らしい女の子だと思っています。

そんな彼女、ポケポケな性格がより魅力的に見えるように神様が与えたのでしょうか、丁度いい具合なある意味黄金バランスに整った体系をしています。

豊満なバストに安産型なお尻。セミロングの髪型にぷにっとした指先。

水泳の時間で見ただのですが、彼女の水着姿はそれはもうとても扇情的でした。

それはまあ置いておいて、周りの変化によく気が付く彼女なだけに、僕が一つため息ついたことに、何か悩みがあるのではないのかと心配になっているのであろうと思われる。

そう。僕には一つ悩みがあった。

それは遡ること一週間前。放課後、一階の売店でジュースを買って、部室である理科室に向かおうと、階段を上っていた時のこと。その時、とある教師と話しながら階段を下りてきた見た事のない制服をまとった女の子とすれ違った。

うちの学校は女子も男子も深緑のブレザーである。

それなのに真っ赤な襟と同色のスカートのセーラー服少女。いや、真紅の炎を纏った女の子とすれ違ったのである。

それから僕はその女の子のことが頭からはなれられないでいた。僕の心は、その女の子が身に纏っていた炎に焼かれ、熱を保有するようにになったといったところであろうか。少女のピツと背筋の伸びた体に宿る凜とした眼差しを思い出しただけで、胸が焦げ付く思いになっている。熱くなってくる。

ああ、これは恋の悩みなのだろうか？

だが残念な事に、それ以来彼女の姿は見かけていない。

僕は幻想を見たのだろうか……。

僕は彼女に会いたくて会いたくて、仕方がなかった。

「はあ……」

またため息をついちゃった……。

「達也君、本当に大丈夫？ 話聞くよー」

「いや、この間さ、とある人とすれ違ってね……」

「女の子？」

「す……鋭い……（汗）。」

僕はとぼけようと思ったが、思ったほか感覚が鋭い桐生さんの前でそれが通用するとは思えなかったので、少しずつ打ち明けていった。

「この学校にそんな制服を着た女の子なんていないよね〜」

人さし指をあごにちよんと突き立てて宙を見て考え込んでいる桐生さん。

「学年が違つと僕達の階と違つから、なかなか会えない……という事なのかなあ……」

僕はそれが一番濃厚な線だと考えられた。

「達也君……………もしかして……………その子のことが好きなの？」

「あはは……………桐生さんには隠せないね……………」

やっぱり察しられたか……………。僕は力なく答えた。

それきり桐生さんは黙り込んでしまった。

僕も深くまで訊くことはしなかったので、担任がくるまで机に突っ伏している事にした。

そして暫くすると担任がやってきた。

「それでは朝のホームルームを始める」

僕はひとまず姿勢を正し、担任の先生がホームルームを始めたのを、ぼーっとながらも聞いていた。

会いたいなあ……………あの子に。

僕は窓際の席であったため、フツと空を見た。

空は筋雲がびっしりと天を埋め尽くしていて、見ただけでその寒さを喚起させてしまうような雲であった。

ああ、空は僕の恋心を冷やしてしまうのであるつか……………と、恨めしく見上げていたら、そこでクラスがワァッと沸いたことにより、漸く何かがあったのだと気が付く。

それに乗り遅れたことを知った僕。だから桐生さんに何が起きたのかと尋ねると、

「転校生だつて」

と、ユルユルに教えてくれた。

ふ〜ん、こんな時期に転校生か……………と少し驚いた。

女子達は「イケメン！」「イケメン！」と、手を叩きながら盛り上がっている。

女子はイケメン以外は要らないのかなあ……………？

「さあ、どうだろうな」

担任はニコニコしながら「それでは入ってもらおうぞ」と言った。

僕は正直それどころではなかった為、興味がいまいち持てなかった。

ガラガラガラ。教卓側のドアを開いた担任。すると、

「喜べ、男子！」

担任はそう言った。

というとな女の子か……………。

視点も曖昧に前方を彷徨い、見るとも見ないとも定まらないままに目蓋を半開きの僕がそこに見たもの、それは。

「あつ……………！」

僕は冷たい空気に火が点らんとしている教室内の空気を少しのみこんだ。

開かれたドアの向こう側には女の子が廊下に立っていた。

そこには背筋のピツと伸びた長身の少女。

廊下から教卓まで整然と歩いてきて、担任の横にて立ち止まるとくるつと体を回転した。

その体の回転に合わせて腰まである髪の毛がふわりと舞った。

凜とした瞳に口元がぎゅっと締まった表情。

それは何者にも後れをとらないと自負しているのであろう、迷いなき確固とした自身に満ちた怯みなき笑顔であった。

「これからお前達と卒業まで一緒に学んでいく新しい仲間の姫野睦さんだ」

そう、見紛う方なきこの姿。

真紅の炎を身に纏った少女。

一週間前、廊下ですれ違ったあの女の子だった！

「皆さん初めまして。ただ今紹介に与りました姫野睦と申します。

訳あってこの時期に転校してまいりました。もうじき冬休みですが、それにかまける事無く皆さんと仲良くなりたいと思っております。

どうか宜しくお願いいたします」

姫野さんはきゅつと体を四十五度に折り曲げ、深々と頭を下げた。覇気とも取れるような勢いのある声に圧倒されていた僕達はシんと静まり返っていた。

そう、桐生さんを除いて。

「よろしくね、姫野さ〜ん」

余裕シヤキシヤキの桐生さんの一言で皆我を取り戻すると、一番最初に拍手を始めた桐生さんに釣られ、次々と拍手が始まった。僕は余りにもこの運命的な再会に（一方的ではあるが）心が躍り、拍手に力がこもった。

「それでは姫野……お前の席だが……」

そう担任が言った瞬間、自分の隣に！ そう期待を込めてか、ざわつき出すクラスの男子達。

女子は正直言っただけ姫野さんに対して完全に怯んでしまったのである。ろっ、キヨロキヨロ見渡している。

「……よし。蓮岡から後ろの者達は、一個席下がれ。桐生、姫野に一番最初に話し掛けたお前に姫野の面倒を見てもらおうぞ」

「はーい」

え？ 何で僕……。彼女の隣になれなかった……？ 多くの男子達と同様に、期待は期待のまま終わってしまったようであった。

ここまで運命的な（一方的であったとしても）再会を果たせたのに……。でも普通、漫画とかなら僕の隣に来るはずなのになあ……。現実には厳しい……。

「達也君？ どうしたの？」

桐生さんが僕のことを見て、いつまでもじっとしている僕に対し、不思議がっている。

「あ、うん……。今下がるよ。」

まあ、彼女のすぐ後ろなのだから良い方が……。

ガタ……。

立ち上がった僕に桐生さんは言葉を放ってきた。

「どうしたいの？ 達也君は……」

「え……」

その問いかけに高鳴る鼓動。いたずらに跳ね上がる心拍数。

「彼女だよ、達也君が一週間前に階段ですれ違ったという女の子は……」

「う……うん……」

僕は息を潜めてうなずいた。

「彼女と付き合いたいなの？」

「そ……それは……」

そうこう考えていたら姫野さんがやってきて、僕に話し掛けてきた。

「蓮岡君ですか？」

「は、はい」

「これから宜しくね。あと、席……ごめんね」

「気にしなくていいよ」

僕はニコリと笑い、席を立った。

「達也君の………ばか……」

僕はその桐生さんのセリフを聞き逃していた。

「ぎゃはははは！」

「サダっちっ、笑うことないでしょっ！」

サダっちが僕の話をもっと聞いてあと、大爆笑を始めた。

僕は抗議したが、サダっちはまだ笑っていた。もう……。

するとサダっちの隣に座っていた木田君がにこやかな顔をしてこ  
う言った。

「そうかそうか、その手の話に奥手と思っていた蓮岡が、とうとう  
恋の花を咲かせたか」

ちよつと、花は咲いていないって！

「もう木田君っ、それは気が早い表現だよっ」

その言葉に便乗してか、サダっちは上から覆い被せるように言葉を  
畳み掛けてきた。

「達也……。お前どうしたいんだ？」

「うう……、何で皆同じこと訊いて来るんだよ……」

「その姫野って奴にチューしたいのか？」

目を瞑ったサダっちは、あひる口になって突き出した顔をうんう

ん振り回した。

「そつそこまでは!？」

僕は実際まだ其処までは考えていなかった。だが……………。

「おお? 達也あゝ、何だそのニヤケ面はゝゝ?」

「ニヤケてなんていないよっ」

「うひゃひゃひゃひゃ」

ボスツ。

「グフ……………」

かなこちゃんの延髄チョップが決まり、旅立ったサダッチであった。

「こういうのをデリカシーが無い言っんですわ」

かなこちゃん。相変わらず手加減しないね(汗)。

「たっくん先輩、実は初恋とか?」

腰に手を当てる身を乗り出し訊いてくるかなこちゃん。

「い、いや。初恋は小六のときに散ってしまったよ……………」

僕は子供の頃の苦い思い出がよみがえってきていた。

「初恋は実らないって言いはりますもんね」

正にそうだった……………。告白は失敗に終わり、傷だけ残って、その後は好きだという思いは蒸発して消えてしまった。あの時の思いは幻だったのであろうか……………。

そうだとすると、今のこの思いも、やがては幻になっていくのかな……………。

「かなこ。そう言うお前こそ、好きな奴は居ねえのか?」

ゴスツ。

「最近なんか復活早いですわ、このケダモノゾンビ……………」

かなこちゃんのエルボーがサダッチの脳天に決まり、再び旅立ったサダッチであった。

「だ、大丈夫かなあ？ 今の結構クリーンヒットしたけれど……」  
サダつちは上体がテーブルに崩れ落ち、顔だけ此方を向いて白目になった。

僕は柄にも無く、サダつちの心配をしていたが、一撃を入れたかなこちゃんはというと、

「良いんですわ。アホなこと言いはるから当然の報いです」

そう言っただけで怒気を表した。

しかしそこで珍しく、木田君がかなこちゃんに突っ込みを入れてきた。

「それもこれも亮への思いがこもった一撃だったんだらう？」

「マグマ先輩。次ぎ言ったら酷いですよ？」

にこやかな顔してさらりとドスを効かした声でセリフを吐くかなこちゃん。その威圧感は凄まじいものが在った。

それにしても、

「チューしたい」

いやはや、サダつちは本当によく堂々と恥かしい事が言えるなあ。

僕にもその位の度胸があつたならば今日一回くらいは話し掛けられたのだけでも……。

「痛つつつつ……で、達也はその姫野って奴と話すことは出来たのか？」

サダつち……もう復活しているし……（涙）。

「どうなのよ？ 携帯アドレスくらい手に入れられたのか？」

サダつちはオヤジのようなニヤケ顔をしている。僕はサダつちの問い掛けが質問攻めに変わる前に早く答えねばならないと思い、とにかく今の二つの質問に対し一つの返答で済むように答えた。

「ううん。一回も話し掛けられなかったよ」

だめだよ。声を聞いているだけで胸の奥がドキドキしてくるのだ。彼女の全てが良く見えてきてしまう。

例えば彼女の着ている制服は、普通のセーラー服ではあるが、僕から見れば炎と見紛う程に情熱的な赤い襟、そしてスカートに見え

くる。

それはまるで真紅の聖炎に護られた女神のように見えてくるのだ。今日一日授業を受けている間、ずっと見つめていた彼女の後ろ姿は、深い黒の美しい髪の毛がその背なに一面広がりを見せていた。

いい香りのするサラサラヘア……言うなれば漆黒の帳であり、僕の思いがその髪の毛によって遮られ、彼女の心まで届かないでいると感じられ、恨めしく、そして切なかった。

彼女は僕よりも背が高く、パリコレに出ているモデルのようにホツソリとはしていないが、体つきは良く、胸は大きい。膝はスカートで隠れていて見えないが、彼女の両ふくらはぎの発達具合から見ると、スポーツが得意そうに見受けられた。

また、彼女の最も特徴的なところであるその瞳。

水晶球のように大きく見開かれた眼は、春になるまで決して融けない残雪のように白い。

やはり春の暖かい光に反射する雪解け水の輝きが如しで、優しく、それでいて強く眩しい光りを放ち立つ。それはこの心の奥にまで真撃に届く彼女の分け隔ての無い慈愛が満ちている代赭色たいしゃいろの眼差しで、その瞳の色を見れば異国の血が混じっていることは間違いないようであった。

だが、何より彼女の眼光。確かに優しいのではあるが、そこに秘めているのは、何者にも負けぬ強い意志。朝も思ったことなのだが、凜としていて、とても真つ直ぐな貫通力がある。

愚かで拙い弱気な僕では見つめ続けることは、とても出来ない……。

そう、僕はそんな彼女の眼差しの前に敗れ去り、一言も声を掛けられなかった。

「そうか、目も見る事が出来ねえ女か……。オレ様も見てみてえな。もしオレ様でも我が身が下賤だと感じる程に神々しい女だったら、是非オレ様の為にうちの部に勧誘してえな」

サダっちでも身が縮こまるような思いをする事ってあるのだろうか……。

しかし、その一言で何故か、かなこちゃんが力チンと来たらしく、それほどの方だったら、パパには似合わんですわ、絶対に！」  
と、憤怒の表情を見せた。

それに対し、ケラケラ笑いながらサダっちは、  
「じゃあ、オレ様に似合う女はどんなタイプだったら似合っただ？」

と、訊き返す。かなこちゃんは、

「そうですね、かなこだったらパパのことしつかり調教して真面目に考える男にしますわ」

「なに言ってるんの、オレ様がいづかなこの恋人になった？」

「！」

かなこちゃん……、返答の趣旨を間違えているよ？

「ふう……、かなこは……かなこは……人生最大の汚点を残してしまっただあ~~~~っ」

「それほど事かいな？」

なんか釈然としない表情でいるサダっち。

かなことパパが恋人だなんて絶対に嫌ですわ。そう言っただけで身震え感じているかのように自らの両腕を抱えて寒そうにしている。

「まあオレ様は構わねえけどよ」

「かなこは嫌ですっ！！」

ウガァッと両手を揚げつつ顔を真っ赤に否定するかなこちゃん。  
かなこちゃん……、やっぱり怒っているの??

ひとり大人な木田君が沸騰しているかなこちゃんに「落ち着け」と言い、話の流れを戻しにかかった。

「それで蓮岡はその姫野という者と親しくなりたいのか？」

「そ……それは……そうだけれども……」

しどろもどろに答えてしまう意気地のない僕。

「はつきりせんか、男だろ。仲良くなりたいたいのであれば、しつかり

思いを定める」

当然のこと木田君はうじうじ悩む僕に発破をかけてきた。

「まあ、オレ様だったならば迷わずにぶち当たるな」

サダつちは自身満々に言つてのけた。

「サダつちは何で姫野さんを勧誘したいの？」

するとかなこちゃんは不機嫌そうに、サダつちが答える前に言つて来た。

「このアホウが言つてましてんね。是非オレ様の為に……て」

ジトツとサダつちを横目で睨むかなこちゃん。さつきからサダつちの事が気に喰わないご様子。まあ面白いんだけども。

「そう、オレ様の為に」

こつちはこつちで意味不明なこと言っているし……。

「何を考えている、亮」

疑わしいものを見る目で木田君はサダつちを見ていた。

「どうせ自分の彼女にしてやろうとか考えておるんですー、きつと」

あからさまにプンプンしているかなこちゃん。

「なあに、それほどの美少女なら、是非勧誘して部員の増強を図るために広告塔にしてみたいなと」

「ほれ見たことか……って、パパ？ 彼女にしたいと思つていたらんとちゃいますか？」

広告塔。その言葉を聞いて毒気を抜かれたかのようにキョトンとしているかなこちゃん。

「聞いたところその手のタイプはオレ様の好みではない。だから特段恋人にしたいとは考えてねえよ」

「そう……なんですか？」

「たりめーだ」

「そつか……。そうですか……。へへへ」

ふーん、と言う感じで答えたかと思つたら急に笑顔が出たかなこちゃん。

「……かなこ。そんなにオレ様が恋人いないのがうれしいのか？」

「かなこには関係ありまへん。どうしてかなこがそんな事で嬉しくならなければならぬんですー?」

ひひひと笑っているかなこちゃん。何か嬉しそうだ。

「よく解らんが現金な奴だな」

「つーんとそっぽを向くかなこちゃん。本当に不思議な子だよ。」

「ところでよー、達也の話をしようぜ?」

「ですわー」

いいコンビの父子だ……。

「え? もういいよ〜」

僕はそう言っただけで断った。この話は僕ではこれ以上はもう進められないだろうし、この思いはまた幻になっていくんだよきつと……。

だってそうじゃないか、僕に話し掛ける度胸が無いんだもの……。

「よくは無いぞ蓮岡。お前は意気地が無さ過ぎる」

そんなにしみじみ言わなくても〜っ。

「だな」

「そうですー。男ならここは一発勝負して恋をものにするんです」

「お、三人の意見があったのは珍しいな」

そりゃ確かにそうだけれども……。

「うむ、明日の昼休み、いつちよ行くかねえ」

え……???

「そうだな」

「かなこは行けないですけれどもー」

「サダつちと木田君、何を考えているの?」

「達也。姫野はお前の一個前の席なんだっけ?」

僕は頷いた。

「よし。明日お前のクラスに行くぞ」

「ええ〜!〜!〜?」

何かやな予感がする……。

「でもっ!〜?」

「フツフツッ」。任せておけ」

腕を組んで笑っているサダっちの顔が邪悪な笑みに見えてきたよ……。

僕はそれから三十分程サダっちに抵抗してみたが、サダっちの「  
任せておけ」は、謎のまま明日のお昼休みに実行される事となった。  
はぁ……。何がどうなることやら……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5116ba/>

---

アゲ八。

2012年1月14日03時47分発行